
迷子のキモチ

愛

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

迷子のキモチ

【コード】

N2932A

【作者名】

愛

【あらすじ】

中学二年生の真子は、同じクラスで隣の家のカズと幼馴染。カズのことは「家族のような存在」だと思ってたはずだったが、いつの間にか恋心を抱くように。しかし、本人はそんな事があってはいけないと否定し続けている。そんな二人の悲しい物語。

迷子のキモチ

第一話（前書き）

素人ですが、どうか……。

第一話

好きだよ
ずっと言いたかった
やっと伝えれた

好きだよ
言えなくてごめん
伝えれなかった

おれは
こんなに想ってるんだ
だから
泣かないで

わたしも
こんなに想ってるのに
だから
涙が出てくる

おれのために
いつもみたいに笑って

君を想うと
いつもみたいにふるまえない

もう隣にいられないんだから
たのに

ずっと隣りにいると思って

迷子のキモチ

今日は久しぶりの青空だった。夏とちがって、冬は天気でも風が冷たい上に気温も低い。早く春になってほしいと私だけでなく皆も思ってることだろう。私は、冬独特の白くくもった息をはいた。

「寒いなあ……」

学校へ向かっていた足を止め、空を仰ぐ。が、見えてきたのは青空ではなく、黒い物体。驚いて目を丸くしたのと同時に、その黒い物体は私の顔面に落ちてきた。ぶつと、少し汚い音を発しながら、顔の痛みにも死に耐える。

「オッス。何ぼさつと突っ立ってんだよ」

その声には聞き覚えがあった。いや、聞き飽きているの方が正しいかもしれない。

「何すんのさつ。顔はやめよーよ、顔は」

まだじんじんいつている鼻をおさえながら、後ろに立っているであろうあの男の方にふりかえる。予想通り、私の思ったとおりの男だった。

「わりい、わりい。朝っぱらから怒るなって」

悪びれもなく、笑顔でそう言った彼は、私の幼馴染の椎名一。私とカズは、三歳のときに出逢って以来ずっと一緒だ。私はカズを家族のような存在だと思ってる。

「怒らせたのはどっちさ」

憎まれ口をたたきながら、私は前を向いて歩き始める。するとカズも、私に合わせて歩いてきた。

「ついてこないでよ」

「同じ学校なんだから仕方ねえだろ」

私とカズは、家族のような存在。この関係はずっと変わらずに、ずっと一緒に笑い合えると思ってた。

「真子、おはよう!」

教室に入って、一番に声をかけてきたのは詩織だった。詩織とは小学校からずっと一緒に、仲良しなのだ。しかし、現在私たちは見事に違うクラスになってしまっている。

「しいは五組でしょ。ここ一組なんだけど」

「良いじゃん、一組の人皆気さくで好きなんだもの」

にっこり笑って私を見る詩織。そんな詩織を見て、つつい口が緩んでしまう。でも、次に詩織が発言した一言で、現実に引き戻された気分になった。

「そつえば、まだ何も起きないわね」

「あ……」

まだ何も起きない!!これから何か起きる。

今年は何かが起きるのだ、何が起きるのは知らないけど……。どこにそんな根拠があるかと言うと、私と詩織のクラスが離れたことにあたりする。

小学二年生のとき、私は一組、詩織は三組。それはある日のことだった。私は始業式早々、交通事故にあった。車にひかれたのだ。

右腕骨折、全治二ヶ月の重傷だった。詩織も次の日、事故にあった。工事中のマンションから物が落ちてきたのが当たってしまい、左腕骨折、全治三ヶ月だった。

その年はやけに事故にあったのだ。

小学四年生のとき、私は一組で詩織は二組。詩織は運動会の時、リレーでこけた。そのせいで最下位だった。私は、運動会の片づけをしてる時にこけた。そのせいでテントが倒れてしまった。その上二人とも、着替えを忘れてしまっていた。

この年は、くだらないミスがやけに多かった。

今度は中学一年生。私は三組、詩織は四組。それは夏休みのこと。私の両親と、詩織の両親が離婚した。きわめつけに、私たちのそれぞれ之母が交通事故にあった。何とか命は助かったけれど、とても生きてる心地がしなかった去年の夏だった。

そして今年、私は一組で詩織は五組。また何かあるだろうと思ってる。最も、何もない方が良いに決まっているのだが……。

「しい……何かやな予感がするのは私だけ？」

「あら奇遇、私もそう思ってたところ」

「……」

「私の勘って良く当たるのよね」

重い空気と不安が私たちの周りを漂っていた。

その時、私たちの後ろから、この場にそぐわない明るい声が聞こえてきた。

「まごお、しい、オッハよ〜！」

それは隣のクラスの愛里だった。私たちは愛里に、おはようと返

事した。

「今日も椎名君かつこいいねえ」

うつとりとした声で愛里はそうつぶやいた。そう、愛里はカズの事が好きなのだ。私から見ればどこが良いのだろうの一言だが、愛里にとってカズは理想の人らしい。私の詩織も、そんな愛里の恋を応援してあげてる、のだが、なぜか愛里と話すときにカズの話が出る。と何ともいえない気持ちに襲われるのだ。家族のような存在のカズが、他の人と付き合うのはやっぱり淋しいのだろうか。

愛里は、カズののろけと観察をしたあと、自分のクラスに戻って行った。

その時、愛里が帰って行ったのと入れ違いに、教室のドアが開いた。それと同時に、失礼しますと礼儀正しい声が聞こえた。

「あの人誰だ？」

入ってきたのはこの学年じゃ見たことない女の人。しかも、同性である私から見ても美人ときた。そして、その女の人はある人物を見つけると、急に顔を明るくさせた。

「カズ〜！」

かわいらしい笑みを見せながら女の人が口にしたのは、なんとカズの名前。私は驚いてカズを見た。それに、私が見たカズは、その人に笑顔を向けていた。

ずきんっ……急に胸が苦しくなった。

第一話（後書き）

下手です。すいません；

それでも読んでくださった皆様、ありがとうございました。感謝です。
良かったらアドバイスなどしてくれると嬉しいです。
これからもよろしくお願いします。

第二話

「カズ〜！」

かわいらしい女の人、たぶん先輩であろう人がカズの元へ駆け寄る。

「どうしたんですか、先輩」

私はまた驚いてしまった。カズが嬉しそうに笑っていたのだ。私はなぜだか、何ともいえない気持ちに襲われた。その感じは、まるで愛里ののろけを聞いている時のようだった。

その後、カズと女の先輩は楽しそうにしゃべっていた。嬉しそうなカズの顔、それがずっと私の頭をかけめぐり、今日授業はまったく身が入らなかった。そのまま部活も終わってしまい、俗に言う”最低な一日”となってしまうた。

「ただいま……」

暗い気分で暗い声でのただいま。それとは逆に、家の中からは明るい声でお帰りと返ってきた。

リビングから良い匂いがする。鉄板でお肉を焼いているような音もしてきた。今日のご飯焼肉かな、と急に妙なウキウキ感を感じながら、食べている最中であろう家族の元へ足を運ぶ。リビングの扉を開けると、机を囲んでいる家族と、その真ん中にある焼肉が見えた。予想通の夕飯に、私のお腹が起動し始めた。

「おかえり真子。今日のご飯は焼肉よ」

にっこり笑ってそう言ってきた母。いつもなら、やったーとか、おいしそ〜などという言葉を返していただろう。でも、私が口にした言葉は、まったく違う言葉だった。

「何でカズがいんの」

険しい表情でそういった私に、みんな仰天していた。いつもの私だったらきつと笑顔でもつと柔らないことを言うだろうから。しかし、今私の口からとび出した言葉はとげとげしい言葉。もちろんカズまでも驚いていた。

妹の璃子が言った。

「どうしたのお姉ちゃん、らしくないよ」

「別にいつもどおりだけど」

「ホントに？」

「ウソついてどうすんのさ」

本当はウソだ。朝からのもやもやの原因と家に帰ってまで顔を合わすなんて、私でなくとも不機嫌になる。でも少し冷たすぎたかなと思ってカズをちらりと見ると、何でそんな態度なんだとも言いたげな目をしている。それでも不機嫌なので、また冷たく言い放ってしまった。

「で、なんでいんの？」

「……親が今晚出かけてるから、夕飯だけお邪魔してきたんだよ」

「ふうん……いただきます」

「この肉焼けてるぜ。ところで何で今日はそんなに冷たいんだよ」

「あ、どうも。別にいつも通りだってば」

「この野菜焦げそうだからとつとと食べる。いつもだったらもつと嬉しそうに顔してんだろっか」

「もうこげてるし。ってか何それ、何でカズに会っただけで嬉しそうに顔しなきゃいけないわけ？」

「焦げてても食えんだろ。とにかく今日のお前冷たすぎ。もうちょっと優しくしないと俺寂しいから」

「そりゃ食べれるけど……。何それ、何だかんだ言っただけで私に甘えてるよね」

皆があんぐりと口をあけてみていた会話はここで終了した。

おかしい、いつもならもつと言ってくるのに、そう思っただけでカズを見ると、カズはむすっとした顔で頬杖をしていた。また私の胸がちくりと痛んだ。すると、カズはごちそう様でしたと笑って我が家をあとにした。

「何なんだアイツ……」

夕飯も食べ終わり、自分の部屋にもどった。

確かに私も冷たすぎたかもしれない、でも元の原因はカズの方でしょ。そう思っただけでまたイライラしてきた。その上、あの女の先輩のことを思い出した。あのカズの嬉しそうに顔……。

「付き合ってるの……?」

また心の中がもやもやしてきた。

「愛里だってカズの事好きなの?」

泣きたいような衝動に襲われそうになった。その時、窓が揺れた音がした。いや、何かが当たった音と言う方が正しいかもしれない。カーテンを開けて窓を開くと、真正面の窓にカズが座っていた。

「カズ……」

「お前さ、謝れよ」

「……はい？」

「さっきの態度に対してだよ！」

「な、なんで私が謝らなきゃいけないのさ」

ああ、素直じゃない私。

カズは少しむっとしたようだ。私は複雑な思いになった。あの女の先輩と、愛里とのことで。私は思った。何でこんなにもやもやした気持ちなんだろう。この気持ちから、すぐにでも開放されたかった。

「ねえ、カズ……」

「ん？」

「あの人はカズの何？」

「あの人？あ、もしかして志帆先輩のことか？」

「……今日教室に来てたよね。」

「そうだけど、何で？」

「え、いや、その、美人だったなあって思ってたさ」

ショックだった。あの人って言っただけで志帆先輩って分かったことに。それにしても、よくとっさにあんなことが言えたなあと思っただ。でもそのせいで、カズは志帆先輩について話し始めた。

部活のマネージャーの先輩、結構仲良い、志帆先輩の性格、カズは色んなことについて喋った。まるで彼氏が彼女のことを自慢するみたいに、口元が緩んで、ほほを染めて……。

聞きたくなかった。耳を閉じていたかった。

「あれ……？」

何で聞きたくないんだ？

「どうした？」

カズが話を中断して、不思議そうに私を見た。話が終ったことに、少しホツとしている自分が憎たらしい。

「ねえカズ」

「ん？」

「付き合ってるの？」

「え……？」

カズの表情が一瞬暗くなった。あ、もしかして、と妙に納得した。

「片思いなんだ？」

「か、関係ないだろ」

「関係ないとは何さ、私とカズは家族みたいなもんでしょ？可愛い弟の恋を実らせてあげたいのは姉として当然でしょ」

「誰が弟で、誰が姉だって？」

「冗談に決まってるんじゃない。本気にしないでよっ。でも、そっかあ、片思いかあ」

「な、何だよ……」

「男なら、とつとと告れ」

それだけ言い残して私は窓とカーテンを閉めた。カズがまだ外で叫んでるような気がしたけど、気にしない。

可愛い弟とは言ったものだな。本当は、あの重い空気が耐えられ

なかつただけだけど。

「片想い……かぁ」

ため息をしながらつぶやく。

「しかも私、何であんなにもやもやしてたんだろ」

二回目のため息。

「ため息つくと幸せ逃げるよ」

「そついえば何かの番組で言ってたよね、って、え？」

後ろを振り向くと、そこには璃子が立っていた。

「なっ、えっ！？いつからそこに!?!」

「片想いかぁ、ってトコから」

「気配なかつたよ!?!ってか勝手に入らないでよ!」

「ま、いいじゃん。で？片想いが何？」

ニツコリ笑う妹を前に、私は三回目のため息をついた。

「なるほど。お姉ちゃんがカズ君に冷たかつたわけがわかつたよ」

「……」

「お姉ちゃんは、その志帆先輩にヤキモチやいてるんだよ」

「……はい？」

「つまり、お姉ちゃんはカズ君のことが好きなんだよ」

迷子のキモチ

璃子のその言葉に、頭の中が真っ白になった。

第二話（後書き）

読んでくださった方々、ありがとうございます。
何が書きたいやら……。話の内容が急かもしれませんが、次回作も読んでくださると嬉しいです。

第三話

私がイライラしてたのは、愛里のためだ。多分……。志帆先輩にヤキモチやいてただの、私がカズのこと好きだの、まったくもって有り得ない！というよりも、あつてはいけないのだ。だって愛里はカズのこと好きだし、カズは志帆先輩のことが好きなんだから。

次の日、学校へ行っても昨日のことが頭から離れなかった。

いつも通り詩織が一組に勝手に入ってきて私におはようと元気よく言う。力なく返事する私に、詩織はどうしたの、と問いかけた。

「ふうん、なるほどね」

璃子と同じようなセリフを言う詩織。

「それってどう考えてもヤキモチでしょ」

「璃子も同じこと言ってたよ。しかもとどめに、お姉ちゃんカズ君のこと好きなんでしょ、だってさ。有り得ないって」

「何で有り得ないの？」

「だって、小さいときから隣の家でずっと一緒だったんだよ？ 私にとっては家族のような存在だし……。それがいきなりヤキモチだの好きだの意味分かんないよ」

そう、カズは私にとって家族のような存在なのだ。今までこれからもずっと、変わらないものだと思うてる。なのに急にこの展開。少女漫画でもあるまいし。それに、

「だってしい、愛里はカズのこと好きなんだよ？友達と同じ人を好

きになるなんて有り得ない。その上カズだよ？ますます有り得ない。小三まで同じお風呂はいつてた仲だし……」

すると、詩織から返ってきたのは言葉ではなくため息。

「何？」

「……真子、私から一つだけアドバイス言っとくわ」

急に真剣になった詩織に、私もつられて真剣な表情になる。

「いい？想いなんて一秒前と一秒後じゃまったく違うの」「いつどう変わっていくかなんて分からない。恋だってそれと同じことなのよ」「どういうこと……？」

私が聞くと、詩織は頭をかきながらため息をついた。呆れてるって感じた。

「失ってから気付いてるんじゃない、もうおそいの。自分の今の気持ちを、正面から受け止めなさい」

今までの全てが壊された気がした。

私がかズのことを好き？さつきも思ったとおり、カズとはこれからも家族のような存在のまま。好きだなんて、有り得ない。この考えだけは否定しなければならぬ。

「あれ……？」

何で否定しなきゃならないんだ……？

「真子！次の問題やってみろ！」

数学教師の怒鳴り声ではっとした。時計を見ると十二時十五分。あと五分で昼休みのチャイムが鳴る。詩織と話したときは確か十時三十五分だった。

「（この二時間何やってたんだ！？）え、えっと!？」

イスから立ち上がって、数学教師をチラリと見ると、眉間に青筋をたてて睨んでいた。その顔はどう見てもヤクザだ。冷や汗が流れた。どうやってこの危機から逃れようか、頭をフル回転させていると、窓側の席の一番前に座っている人がスリーピースしていた。カズだった。私の鼓動が高まりだした。それは数学教師が怖いからとかではなく、カズのせい。

「何だ真子、分かるのか分かんのか、はつきりしろ!」
「え、あ……」

もう一回カズを見ると、まだスリーピースをしていた。すると、目が合った。カズは苦笑いしながら口パクして何かを伝えようとしている。

『さ・ん』

「さ、さん?」
「お………なんだ分かってるんなら自信もって言え」
「あ、はい」

それからすぐにチャイムが鳴った。私はほっと胸をなでおろす。カズがいなかったら本当に危なかった。それよりも、カズが私を助けてくれたという嬉しさがこみ上げてきた。

「……」

「おっばかな真子ちゃん、僕に何か言うことなあい？」

さわやかな笑みを浮かべたカズ君でした。

「あら、ドウモアリガトウ、お調子者のカズ君」

「うわ、何かありがたいのトコだけ棒読みだったな、オイ」

「ま、ホント今回は助かりました」

「さすが俺だな！」

カズが笑った、私に向かって。不思議なくらい嬉しい。心のもやもやが無くなって行くのが自分でも分かる。

もう、私は自分の気持ちを否定できない。愛里、ごめん、私カズの事好きだ。好きだって気付いたしまった。

気付いてしまった自分の気持ちに、私は少しくすぐったくなった。晴れていた空が、くもり始めていた。

第三話（後書き）

はい、第三話終わりましたあ！（拍手）
ついに物語がスタートし始めたって感じですよ。本番はここから！の
はず・・・（オイ）
物語の感想とかくねると嬉しいですよ

第四話

「真子」

お昼休み、購買で残り物のパンを買っていたら、誰かが私の名前を呼んだ。声がした方を振り向くと、そこには愛里がいた。その瞬間、急に罪悪感に襲われた。

「あのね、あのね！ 椎名君とさっき喋っちゃったの！」

愛里の口から出たのはいつも通りののろけ。聞き飽きたし、喋った程度ではしゃぐ彼女を見ると、さらに罪悪感が積もる。
この子の好きな人を好きになっちゃったんだ、私って……。

「そ、そうなんだ」

「あれえ？ 反応悪いよお？ どうしたの？」

「ううん、何でもない」

「そう？ 具合とか悪いんじゃないか？」

「うん、平気平気」

ニッコリ笑った私を見ると、愛里はまたのろけの続きを話し始めた。人の気も知らないで、カズのことを嬉しそうに話す愛里が少し憎らしくて、でもその笑顔はまぎれもなく恋する女の子だと思った。
痛い……。ズキズキと、少しずつ傷が大きくなっていく感じがした。

「……で、椎名君笑ってくれたの。すっごい嬉しい！」

「そう……」

今度は痛くなかったけど、イラッときた。これがヤキモチというやつだろう。またヤキモチを妬いてしまった自分に、吐き気がする。自分は他のみんなと違って汚いんだって、そう思ってしまう。

「よかったじゃん！」

「うん」

自分の演技の上手さに自分でビックリ。愛里は、教室に戻っていた。

胸が痛い。痛い、痛い。愛里を見ると、志帆先輩を見ると、カズと喋ってる人を見るとイライラする。こんな醜くなるんだったら、やっぱり好きってこと気づくんじゃなかった。

「カズ……」

一人、冬の寒い屋上に座りこんでカズの名前を呟く。

「カズ……」

何を伝えたいのか解らないけど、ただただカズの名前を叫びのよように呟く。何度呟いても、冬の強い風のせいで、それはかき消されてしまう。そのせいで、私はますます切なくなつた。

「何でカズなの……？ 何で愛里はカズの事が好きなの？ 何でカズは志帆先輩の事が好きなの？ ……なんで私はカズの事が好きなの？」

誰もいない屋上に静かに響く。それはまるで悲痛のように。

「カズ……」

昼休み終了のチャイムがなっても、私はそのまま座り込んでた。

放課後になった。生徒達が運動場に出始めてから、私は教室に戻った。さすがに体も冷えきっていた。

私たち二年生の階は、人っ子一人いなかった。そのせいなのか分からないけれど、今の私にとって一組までがとても長く感じた。すると、他のクラスは真っ暗なのに、一組からは明かりがもれていた。誰かいるのかな、と思いガラスから中を覗き込んだ。

「！」

そこには、カズと志帆先輩がいた。驚きとショックで、目が見開いてしまったけど、私は気付かれないようにその場を去ろうとした。でも、見つかってしまった。

「真子……！？ お前何やってたんだよ、今まで！」

「……屋上でサボってた」

「アホか！体冷えんだろぅが！」

「大丈夫だつて！」

私の腕をつかもうとしたカズの手をふりはらい、叫んでしまった。叫んでから後悔した。

「あ……ごめん」

「い、いや」

嫌な沈黙が私たちの間を流れた。私からは何を言っただけで良いのか分からなかったから、つい黙ってしまった。そして、ついに沈黙が破られたと思ったが、意外にも破ったのはカズではなく志帆先輩だった。

「真子ちゃん、だよな？」

「はあ」

「サボりは暖かい日にしなね。それじゃ、カズ、しつかりね」

前見たまんまの、かわいらしい笑みで、それだけ言い残して先輩は教室から出てった。また、妙な沈黙が流れる。このままだとずっと沈黙が続きそうだったから、私は急いで何か話題を探した。

「ご、ごめんね、せっかく志帆先輩と喋ってたのに私邪魔しちゃってさ」

「別に」

「そ、そう？」

「それより……俺、お前に話したいことあるんだけど」

話したいこと？嫌な場面が私の中を駆け巡る。もしかして私、カズの事怒らせた？

「な、何改まつちゃって。あ、もしかして恋の相談ですか？」

わざと明るく振舞う。でも、カズは首を横に振った。

「じゃ、じゃあ何？」

「いいか？ 逃げるなよ？ 驚いても決して逃げるなよ。」

「う、うん、わかった」
「実は俺、ずっと」

その瞬間ものすごい勢いでドアが開いた。カズが何かを言いかけたけど、それさえも止まってしまった。

教室のドアの方に目を向けると、そこに立っていたのは愛里だった。

「あ、愛里……」

一番会いたくない人に会ってしまった。さっきのカズの言いかけの事などすぐに頭から離れてしまったほどだ。今まで通りに振舞えと必死に脳は命令してるけど、なかなか体が言う事を聞かない。

「ま、真子……ごめん、何か話してた？」

「う、ううん、大丈夫」

「そう、それより椎名君、話があるの」

愛里がカズの方に歩み寄る。一大決心をしたような顔。いつもと喋り方さえ違う。それですぐに分かった、告白するんだって。

「私、椎名君のこと好きなの。一年生の時からずっと」

「えっ……」

愛里が何でいきなり告白にうつったのか解らない。昼休みまでのろけばかりかしてたのに、それに私は何も聞いてない。それよりもカズが良い返事をしてしまったらどうしよう。でも、私はずっと愛里のことを応援してた。私は愛里とカズが付き合うことを望んでるはずだ。そう、自分に言いかけながら、カズの返事に耳を傾けた。

「じめん」

カズの口から出たのは、ごめんの三文字。嬉しいような悲しいような複雑な心境になってしまった。しかも、次にカズが言ったことによつてさらに複雑になってしまった。

「俺、真子のことが好きなんだ」

真子つて誰……いや私だ。私以外、真子なんて子いない。……え、カズが私の事好き！？有り得ない！

「お前は？」

頭が真っ白になった。これが真実なら、正直嬉しい。地球が爆発しても笑っていそうなほど嬉しい。でも、愛里の前だ。私はうつむいて黙った。結局、出した答えはこれだった。

「考えさせて……」

「し……！」

部活中の詩織を呼び出した。

「私……カズに告られたの！」

「マジ？良かったじゃないの」

「でもね、愛里の前で告られたのさ」

「うわ……まさに修羅場ね。って言うか椎名君は志帆先輩の事好きなんじゃないの？」

そう、それが一番の謎だ。一瞬、冗談かと思ってしまった。

「ところで、なんて答えたの？」

「普通はそれ一番最初に聞くよね。……考えさせてって言った。」

「で、わざわざ私にどうしたら良いって聞きに来たの？」

「その通り！良く解ってますね……」

「私何もアドバイスなんか言っただけよ？恋愛経験少ないし」

……正直私は、ウソつけて思ってしまった。実は詩織はモテるんです。美人で運動神経抜群で、男女問わず仲良いんです。そんな子がモテないわけがないでしょう。

「ま、素直な気持ちで答えてあげたらどう？ 愛里とか関係なく、自分の気持ちでね」

「うん……解った」

「じゃ、部活あるから」

「ばいばい」

詩織はそのまま体育館に入ってしまった。私は、詩織が完全にいなくなるのを見届けてから、学校を後にした。

私はどうしたら良い？

私が良い返事を出しても、悪い返事を出しても、誰かは傷付いてしまう。

どうしたいんですか？

迷子のキモチ

どうするべきなんですか？
この答えは誰も教えてくれなかった。

第四話（後書き）

第四話です。主人公、迷ってますね……。気持ちが悪くついでますね。さあ、これからどうなるのか！それは作者の気分次第。（オイ
次回はカズと真子の出会い編に入っていきます。

迷子のキモチ

第五話（前書き）

一番長いかもです。

第五話

家に帰ると、お母さんはアルバムを広げていた。

「ただいま、何やってんの？」

「おかえり、見れば分かるでしょ」

お母さんの周りにはたくさんの写真が散らばっていて、片付けているのが散らかしているのが分からないくらいだった。

私も空いているところに座り込んで、ときどきに写真を手にする。

「あ、これ璃子だ」

「あら、ホントね。あの子写真にあんまり写ってないのよね。昔からカメラ嫌いで」

「璃子らしいじゃん」

手に持っている璃子の写真は、五歳くらいだろうか、隣でピースしている女のことは正反对で、璃子は嫌そうにピースしている。本当にあの子らしいな、なんて思っていると、急にお母さんが声を上げた。

「ちよ、真子。これ見てみなさいよっ」

口を抑えながらなにやら興奮しているようだ。なんだろうと思って、写真をのぞき込む。

「うわっ……」

そこには、三歳の私が写っていた。

そして、私と一緒に写っている男の子……

「カズだあ……」

泣いている私を、カズがおんぶしているショットだった。

「これ、私とカズが初めて出会ったときの写真だよな」

そう、それは私たちが三歳の時の夏休み。家族で動物園に行ったときのこと。

私は迷子になった。

「ちち……はは……」

確か私はお父さんとお母さんのことを呼びながら、人ごみの中泣き歩いてた。夏休みだったせいか、たくさん親子連れが居て、小さかった私にとって、知らない人たちが周りに居ることは恐怖以外の何者でもなかった。

右も左も分からなくて、必死でお母さんとお父さんを探そうとしたけど、周りの大人たちが壁になって、私の視界には足しか入ってなかった。小さい私に気付いてくれる人はいなくて、それはとても心細かった気がする。

泣き歩き疲れた私は、人ごみからやつのことで抜け出し、隅っこの方でちぢこまった。

「ちちい……ははあ……」

それでも小さい私は、どこに居るのか分からない両親のことを呼んでいた。

その時だった。カズが、私の目の前に初めて姿を現したのは。

「おいつ、おまえ！ なにやってんだ！？」

大きな声で、真っ直ぐに私を見てそう言った小さいカズ。でも小さい私は、自分と正反対のカズがとても怖かった気がする。なぜって、とても強気な態度だったから。小さい私にとって、カズは新しい人種だった。

「もしかしてまいごか？」

「……うん……」

「よし、わかった！ おれがおまえのママとパパさがすのでつたつてやるよ！」

「え……」

「のれ」

驚いている私をよそに、カズは一人で話をすすめていった。そして、ひざを地面につけて、私に背を向けて短く一言そういった。そう、それはまさしくおんぶ。私はカズの事が怖くって、ただ言う事を聞いてた。

「おまえ……なまえは？」

「……」

「おれ、カズっていうんだ」

「カズ……くん？」

「そう、おまえは？」

「真子……」

「マコか、よろしくなっマコ」

その時のカズの声が、さっきと打って変わって優しくなった。それがやけに安心して、私はまた泣いてしまったっけ。

「なつかしいなあ。最後私、カズになついちゃって別れるときにまた泣いてたっけ」

「結局隣に引越してきて、今もずっと一緒なものね。笑っちゃわ」

「……あの時から、今とそう変わらない性格してたなあ」

そう、今と変わらないあの性格で、迷子になっていた私を引っ張ってってくれた。カズは、あのときの私にとっての“救世主”だった。

「ああ、そっかあ……」

もしかして私、初めてカズと出会ったときから……。

『素直な気持ちで』

詩織のアドバイスが急に私の脳裏をよぎる。

「素直な気持ちで……か」

気付いてしまったら、もう行動に移すしかないでしょう。
その時ちょうど電話が鳴った。

「私出てくる」

お母さんに一言そういつて、廊下に出た。

「もしもし」

『……………真子？』

「そうだけど……………もしかして愛里？」

『うん、愛里』

突然の愛里からの電話。しかも、今日にあんな事があったというのに。

「どうしたの？」

『……………真子、椎名君と付き合っつもの？』

「……………今までね、ずっとその事考えてた。でね、今気付いちやっつたの。私初めてカズと出会ったときから、カズの事好きだったんだつて」

私は、思ったことを愛里にそのまま告げた。いつの間にか私の顔は、笑顔になっていた。気付いたことに対しての、喜びに対して。

『そっか……………。ま、しょうがないか』

「うん、ごめんね……………」

『全然っ！このくらい何ともないわよ。……………ねえ、真子？』

「うん？」

『椎名君のこと、いっぱい……………いっぱい愛してあげてね』

その時の愛里の声が、少し震えていた。

「うん……………当たり前でしょ。まかしてよ……………ね」

嬉しいはずなのに、これで良いはずなのに……。

愛里との電話を切って、私は大きく深呼吸をした。そして電話番号をゆっくり押ししていく。もちろんそれはカズの家電話番号。私の耳に、電話の呼び出し音が静かに鳴り響く。

『もしもし』

「あ、真子です。こんばんは」

『あら真子ちゃん、珍しいわね。カズなら今コンビニに行ってるわよ』

「どこコンビニに行ったかわかります？」

『さあ、多分近くのコンビニに行ってると思うけど』

「ありがとう、おばさん！ それじゃー！」

乱暴に受話器を置いて、玄関にほつり捨ててあるコートを羽織ながら叫んだ。

「ちょっとコンビニ行ってくる！」

「え！？ ちょ、真子！？」

お母さんのわめき声が聞こえたけれど、私は外にとび出した。

外は、雨が降っていた。今は小降りだけど、すぐに強くなっているだろう。でも、私は走った。とにかく一番近いコンビニ目指して。

今は、好きだと気付いた時の、心の痛みも迷いなど全然ない。やけにスッキリしている。愛里や志帆先輩には悪いけど、私はカズに想いを告げる。11年間の想いを。

私の左手にはあの写真が握りしめられていた。

『ねえ、おもくない？』

『おもくねえよ。はあ…はあ…』

『でもさ、すごいあせだよ？』

『だいじょーぶだって！ だって、マコおろしたらまたまいごになっちゃうだろ！ そしたらひとりぼっちになっちゃうだろ。そんなのマコ、すごいさみしいだろ！』

『カズくん……だいじょーぶだよ、おろして』
『でもっ』

『て、つなげばだいじょーぶでしょ？』

『……！』

『ねっ？』

『……そうだなっ』

どこを探しても、カズは居なかった。それでも、私は走った。重かったのに、私がかみしくならないように頑張ってくれたカズに比べれば、雨の中走るくらいどうってことはない。

その時大分、息が荒くなっていた。白い息を吐きながら、広い街の中で必死にカズを探す。

『いない……』

私はただこの気持ちを伝えたくって、がむしゃらに走る。どこにいるのか分からないけれど、カズの面影を探してただがむしゃらに。

『え、真子が？』

『そうよ、アンタの事探してるみたいな感じだったわ』

『……俺、ちょっと行ってくる』

「ちゃんと見つかるまで帰ってくんじゃないわよ!」

『真子っ!』

『ははあ!』

『どこ行つてたのよ! 心配したでしょ!』

『ははあ……!』

『あら、この男の子は?』

『カズくんだよ。マコのおともだちなの! たすけてくれたの!』

『え……おともだち? おれと?』

『うんっ! マコとカズくんはおともだち!』

『良かったわね、真子。』

『うんっ!』

『カズ君も、ありがとうね』

『……おう』

さつきからあの日のことばかり思い出す。やっぱりこの写真のせいでだろうか。

お母さんも、私を探す時こんな気持ちだったのかなって思った。

この人ごみの中目を凝らして、大切なたった一人を探して、それでもなかなか見つからなくて。

私の息は完全にはずんでいた。久しぶりに走ったな、なんてしみじみ思ってしまう。私は、立ち止まって息を整えた。

その時だった。一瞬、私の名前を誰かが呼んでいる気がした。気のせいとは思ったけど、集中して周りの音を聞いてみる。

「……子! 真子!」

今度は、しつかり私の耳に届いた。もちろんそれがカズだった。とにも、すぐに分かった。

「カズ！ カズ！ どこ！？」

私も力の限り叫んだ。息が苦しいとか、雨が降ってて寒いとか関係ない。失ってから気付いてるんじゃないって、詩織も言ってたじゃないか。私はカズを失いたくない。そのためにも、今は人目の気にせず、ただただカズの名前を呼ぶ。

屋上の時みたいに、小さい声じゃなくて良い。カズまで届くように……！

「真子！？ どこいんだ！？」

私は、人をかき分けて声ができるほうに歩いた。そして、人ごみからやっとのことで抜け出して出たところは、交差点だった。車がたくさん行き交う中、じつと向こう側を見据える。私の目は、今カズしか映ってないみたいだ。向かい側にカズが居た。

人や車の雑音が一気に私の耳から消えて、雨の激しい音だけが聞こえる。目の前に映るのは、カズだけ。よく見るとカズは、傘をさしていないかった。それに、肩を使って息をしているのが、一目で分かった。

カズも、一生懸命探してくれたんだね。

「真子！ お前っ……どこ行ってたんだよ！」

「カズにつ、言いたい事があったの！」

「そんなの家でも良いだろうがっ……！」

「カズが帰ってくるまで待ってたら遅いの！ 今すぐ伝えたいの！」

信号が青になった。それと同時に私たちは走り出してた。

まず最初に何が言おうかとか、どうやって言おうかとか、考えることはいっぱいあったけど、そんなことより

カズの隣に行きたい

一瞬の出来事だった。信号無視した自動車が突っ込んできて、その車からかん高いブレーキ音がしてきたと思っただら、その次にもの凄い衝突音がして、それと一緒に、カズの体が宙を舞った。

『カズくん、いっちゃうの?』

『.....』

『やだよ。もっとあそぼよ』

『わがままいうなよ』

『だってえ』

『いいか?またぜったいあそべるから』

『ほんとに?』

『ほんとだ。だから、こんどあったときに、きょうみたいにないでたらダメだからな』

『うん.....』

『やくそくだぞ!』

『うんっ、やくそくな!』

ゆびきりげんまん ウソついたらはりせんぼんのーますっ
ゆびきった

第五話（後書き）

この回はもっと感動的に書きたかったです…。でも願い叶わず、実力敵わず（涙

思い出の話ももっと上手く取り込んでいけたらよかったなあと思っています。

そこら辺のアドバイス、ぜひ（願；

第六話

全ての動きがスローモーションに見えた。

車が出っ込んで、カズにぶつかって、そのまま空中に浮いて、地面にたたきつけられ、カズの周りから、赤い血がとめどなく広がっていた。

「カ……ズ……？」

周りがざわつき始めた。携帯でどこかに連絡をする人、倒れているカズを見て顔を青くする人、色んな人がいた。私はその二つのもちらにも当てはまらない。ただ、目の前の光景が信じられなくて立ちつくすしかなかった。

カズの周りに広がっていた血は、雨のせいでさつきよりも広がっていた。まるで海みたいだ。私は、叫び声もあげなかった。

すると、カズに駆け寄っていたサラリーマンの人が私に手招きをした。

「君、このこの知り合いだね。今救急車呼んだから、この子についていてあげて」

「救……急車……？ え、何で……」

「え？」

「カズなら平気だよ。そんな……救急車呼ぶほどでもないよ。ねえ、カズ、大丈夫だよ。」

私がかけても、返事は返ってこなかった。

「カズ……？ ねえ、カズ。カズったら、ねえっ」

「君！ やめなさい。わかるだろう？」

「……分からないよ、分かりたくないよ……！　だつて、だつて……さっきまであんなにピンピンしてたのに、伝えたいことあったのに……せつかく胸張って好きだって言えそうだったのに……！　ねえ、カズ、このまま目が覚めないなんてことないよね？　ねえ……答えてよ、いつもみたいないな強気な態度で言つてよ！　嫌だよ……こんな終わり方嫌だよ！」

私の悲痛な叫び声が、雨の中で響く。でも、雨にかき消されて、私の声はカズに届かない。それはまるで、あの日迷子になった私みたいに、とても寂しくて怖かった。

「っカズ！　起きてよ！」

このときの私はよっぽど頭がおかしくなっていたのかもしれないとカズにビンタをしてしまった。それも一度ではなく、何度も。さっきのサラリーマンの人が慌てて止めに入った。それでも起きないカズに、私の目から涙がこぼれた。

「起きなさいよ！　私こんなの嫌なんだからね！　アンタだけ先に死ぬなんて怒るからね！　カズ！」

「う……」

カズの指先が少し、ほんの少しだけ動いた。

「カズ！？」

「いてーな……それに……頭に響くんだよ……」

「カズ……！」

「うわ、何泣いてん……だよ、ブス」

「ブスは余計だよ！　ったく……」

「お前……約束破ったな……」

「約束？ あ……………」

私はあの日の別れる時にした約束を思い出した。

「ごめんね……………約束守れなくて」

「……………なあ真子、俺が死んだら、その約束無しにすつから」

「え……………？」

その言葉は、もうすぐカズが死ぬって、私にはそういう風に聞こえた。

「なっ、縁起でもないことっ！」

「う……………ごほっ、ごほっ、げほっ」

急にカズが苦しそうに咳をし始めた。

「カズ！？ 大丈夫！？」

カズの背中をさすっても、咳は酷くなる一方。そして、一番ひどい咳をした時カズが血を吐いた。真っ赤な血だった。私は何も言えなくなつた。

このままだと、カズが死んじゃう……………！

「カズっ！ もう喋らなくていい！ 喋るな！」

私の目から、また涙がこぼれた。それを見たカズは、私の忠告を無視してこう言った。

「ンなわけに……………いかねえだろ……………、お前、ごほっ……………言いたいことあるって……………言つたじゃねえかよ。言えよ……………」

「そんなっ、今それどころじゃないよ！」
「言えっつて！」

カズが怒鳴った。それは泣いているように聞こえた。その後、カズがまた咳き込んだ。

「っ……もう時間がねえんだよ……！」

多分、カズが一番分かっているんだ。もう自分が手遅れだということ。だから怒鳴ったんだ。めったに怒鳴らないのに。

「カズ……」

「……」

「私、カズの事好きだよ。大好き。ずっとそばにいて欲しいの。」

無表情だったカズが笑った。

「サンキユ……俺も、真子のこと好きだ……。でも、最後の願いは聞いてやれねえ……」

「カズ……」

「叶えてやれねえことは、約束しねえ主義なんだよっ……」

すっかりとした口調で、私をまっすぐ見て言った。

カズの息が荒くなってきた。苦しそうに顔を歪めている。もう終わりか近いかも、私はそう思った。そう思ったとたん、口が勝手に動いた。

「カズ……私頑張るから、色んなこと頑張るから、だから、カズも最後まで頑張っつて……」

「ああ」

「……私、絶対、一生カズの事忘れないよ、だからカズも、私のこと忘れないで」

「ああ」

「カズ……大好きだよ」

「……ああ」

短かったけど、カズはちゃんと返事をしてくれた。そんなカズが愛しくて、涙が止まらない。私の涙は、カズの首下に、ぼたぼたと落ちていく。そんな私に、カズは痛くて上がらないであろう腕を、私の目元まであげ、涙を拭いてくれた。

「カズ……」

「な……真……子……」

「な、何？」

大分、カズの声が聞き取れにくくなってきた。早く救急車が来ることを、心の中で祈る。

「俺のことは、ごぼっ……忘れて良いから……」

言葉を失った。

「なっ、何いってんのさー！」

「真子」

反抗しようとした私に、カズは厳しく私の名前を呼ぶ。その声にはまた言葉を失ってしまう。すると、カズは厳しい表情をやわらかくさせた。

「笑えよ」

その言葉に私はまた泣きそうになった。だけど、手で乱暴に顔をぬぐって笑った。顔が引きつっているかもしれない、変な顔かもしれない、でもカズを見たら、自然と笑顔がつくれた。カズは私の全てだ。

「マコ……好きだ……」

また、カズの手が私に伸びてきた。そして、私の頭を掴むと、自分の方に引き寄せた。一瞬、何が起こったかわからなかった。カズの顔が有り得ないほど近い。だからすぐに分かった。初めてのキスは、血の味がした……。その時、やっと救急車が来た。

「カズ！ 救急車来たよ！ ……カズ？」

カズを見ると、カズは目を閉じていた。まるで寝ているように。

「カズ……？」

「残念ですが……」

病院に運ばれて、30分後のことだった。医師から出た言葉は、残酷なものだった。

「死……んだ……カズが？」

私が半分放心状態で問いかけると、医師はこっちはです、と言って、ある部屋に案内された。

そこには、カズがいた。

「カズ……」

カズはベッドの上に寝かされていた。ゆっくりと近づいて、カズの顔に手を当てる。いつもなら息が当たるのに、手には何もあたらぬ。

「本当なんだ」

本当にカズは死んだんだ。

「もしかしてまいごか？」

「おまえなまえは？」

「おれはカズっていうんだ」

「おまえは？」

「マコか、よろしくなマコっ」

「おまえまたひとりぼっちになっちゃっただろ、そしたらさみしいだらー！」

「やくそくまもれよ」 「俺、真子のが好きなんだ」

「真子！？ どこだ!?!」

『マコ……好きだ……』

その瞬間、私は急に震え出し、口から声が出た。言葉になっていない、叫び。自分でも不思議なくらいの叫びだった。看護師さんが止めに来た気がするけど、覚えていない。

何でこうなったのかとか、これからどうすれば良いのかとか、全然分からなくて、理解でいたのはただ一つ。カズが死んだ。

第六話（後書き）

最終段階に入ってきました。後一話か二話くらいで終る予定です。
最後まで読んでくださいね

第七話（前書き）

今回は短めです。これから終わりに向けて短くなっていくかもです。

迷子のキモチ

第七話

あるひの日曜日、天気は晴れ。

カズの葬式は、速やかに行われた。カズの家族、私の家族、学校の人たち、みんな来てた。そして、みんな泣いていた。隅のほうで見ながら、その様子をただ見ていた。

「真子……大丈夫？」

詩織が、私の横に立って心配そうにしている。

「……大丈夫だよ」

詩織に心配をかけちゃいけないと思ったものの、自分の意志とは関係なく声が震えた。それから私たちは、黙ったままだった。

カズの体は、灰になって空へと帰っていった。カズがこの世から消え去るのなんて、とてもあつけないものだった。今までの私たちの出来事が、ウソみたいに思える。

私と詩織は、誰もいない、静寂に包まれた公園でベンチに座っていた。葬式の時から、ずっと黙ったままだ。この沈黙を破ったのは、私だった。

「私……」

「え？」

「私さ、カズに告白したんだよね」

それを聞いた詩織は、またうつむいてしまった。

「私たちね、両思いになったよ。カズ、私の子と好きだって言うてくれた……」

静かな公園に、私の声だけが響く。

「でね、ずっと考えてた。何でこんな事になったのかって……
・私のせいだよ……」

「真子……」

「私が、大人しく家でカズの帰りを待つとけば良かったんだ。私がカズの事追っかけて行ったりしなかったら良かったんだ。私のせい……」

「真子のせいじゃない！」

いきなり詩織が勢いよく立ち上がった。詩織もまた、めったに怒鳴らない方なのに。

「真子の……せいなんかじゃない……！」

詩織の声と肩が震えていて、顔はうつむいていて分からなかったけど、とても寂しそうな、そんな叫びだった。

「……でもね、結局、私のとった行動は、たくさんの人を悲しませることになったよ」

カズの家族も、私の家族も、詩織も愛里も、学校の人たちも志帆先輩も……私も……。

「みんな泣いてた。みんな、カズの事大好きだった。カズはみんな

から愛されていた……」

そのカズを奪ったのは誰？ 私だ。私が殺した。

カズに対しての気持ちに気付いた時の心の痛みとは、またちがった痛み。もつとどす黒くて、もつと深く、とても悲しい痛み。

私は歯を食いしばった。

「……真子、確かに椎名はみんなから愛されていた存在だと思う。でもね、椎名が一番愛していたのはアンタだよ、真子」

「私……」

「そう、だから、自分のせいなんて思わないでよ。自分が死んだせいで、真子が責任感してるなんて知ったら椎名悲しむよ？」

「カズが……」

「うん、それに真子は何も悪くないの。すぐに追っかけていくほど、早く気持ちを伝えたかったんでしょう？ 椎名は、その真子の気持ちの方が何より嬉しいよ」

ねっ、と言って詩織がにっこり笑う。詩織だって辛いに決まっているのに、そう思うと散々泣いたはずなのに、涙が出てきそうになる。私はさらに歯を食いしばった。

「ねえ、真子？」

詩織の声が、震えているように聞こえた。詩織が声を押し殺して泣いているのが、空を見上げてでも分かる。

「何で、泣かないのよ……」

「……」

「私たちが泣いてるのに、何で一番悲しいはずのアンタが泣かないのよ……！ なんてっ、椎名のこと一番愛してたアンタが泣かない

のよー！」

詩織の悲痛な叫びは、私の中でも響き渡った。何かがぷつんと切れたように、涙は静かに音も立てず、私のほほをつたっていった。その間、また、カズとの思い出が走馬灯のように蘇っていった。

第八話

あれから、一週間が経った。学校もいつも通り登校して、友達ともいつも通りくだらない話ばかりして、カズのいない毎日を、いつも通り過ごした。まだ一週間、この一週間は、私の人生の中で一番長い一週間だろう。

「真子、次の問題やってみろ」

数学の教師が、私の名前を呼んだ。はっとして数学教師を見上げる。すると、ぼうつとしてた私に数学教師は青筋を立てていた。もちろん私は授業など全然聞いてない。

「あ…えつと…」

この状況をどうやって抜け出そうか、私は頭をフル回転させた。

「何だ、分かるのか分かんのかはつきりしろ！」

数学教師の怒鳴る声が私の頭を響く。私はなぜか左ななめ前の方を見た。まるで誰かに助けを求めるように。そこはカズの席だった。

「真子！ もういい、そのまま立ってる！」

数学教師の怒鳴り声なんか、もう耳に入らなかった。

ついカズの席を見てしまった。私は、今までカズに頼りすぎていたのだと、改めて実感した。カズは私の全てだったんだ。

カズの葬式の後からたくさんのが分かった。志帆先輩はカズの友達の姉だそう。カズの相談に乗っていたそう。つまり恋の相談。私についての相談。私のヤキモチは無駄だったみたい。私はなぜか、少しだけ嬉しかった。

「カズ、私に自分のこと忘れろって言った」

「うん」

「カズの気持ちいまいち分かんないよ、しい」

「普通に考えてみないさいよ。分かるでしょ？」

私はしばらく考えた。でもやっぱり、少女漫画風のことしか思い浮かばなかった。

「その様子だと、少女漫画風のことしか思い浮かばなかったみたいね」「」名答…」

そんなことしか思い浮かばない自分が情けない。

「ま、多分真子が思ってることで正解よ。自分の事が忘れられないせいで、真子が悩むなんてイヤだったね」

「本当にそうだったら良いな…」

カズが私を思ってそう言ってくれたなら嬉しい。でも無理だ。

「私カズの事忘れない。って言うか忘れられない。カズがなんと言おうとね。それに、カズを忘れられないせいで悩むのなんて本望だ」

よ。私、まだカズのことでもちつとも悩んだことない。まだ、カズのことでも悩みたい」

詩織は驚いてた。そんな詩織に、私ははにかんだような笑いをし
てしまう。

カズが死んだ、その事実は変わらない。まだまだ心は揺らいでて、
たまに無性に泣きたくなることだってあるだろう。でも私は頑張ら
なくちゃいけない。カズのいない世界を私はこれから生きていくの
だから。

でも、大丈夫。たとえ迷子になつたとしても、もう一人で戻れるか
ら。

これから私は、カズのいない世界で生きてく。

第八話（後書き）

今まで読んで下さった方、ありがとうございました。

まずは謝罪を。終り方について：本当にごめんなさい。この終り方には不満を持つ方が多いでしょう。

「迷子のキモチ」って言う題は、迷子になった真子の気持ち&真子の気持ち_が迷子になったと言うのをかけてみたんですけど、どうでしょう…？

これで終わってしまいました_が、今まで読んで下さった方は本当にありがとうございます。感謝しています。

また、文の構成や表現・終わり方などにもアドバイスをくれると嬉しいです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2932a/>

迷子のキモチ

2009年4月12日07時33分発行